

# クローチエにおける「文学」概念の形成 (一九三五年から一九四一年)

倉 科 岳 志

はじめに

「詩に関する本」と「歴史に関する本」

「直観」から「詩」へ

「文学」と「文明」

おわりに

はじめに

S・ヒューズは著書『意識と社会—ヨーロッパ社会思想史一八九〇—一九三〇』において、G・フロイト、B・クローチエ、M・ヴェーバーを主人公にしながら学問史を論じ、なかでもヴェーバーを社会科学における因果関係やモデルといった方法論上の提案により、実証主義と観念論の論争を架橋できた唯一の思想家であったとして高く評価している。<sup>(1)</sup>しかし、じっさいには、人文学から距離をとり価値の相対化を図りながら社会科学へ至

るヴェーバー的な展開のほかに、人文学を基礎に観念論的価値体系のもとで学問秩序を構成し、総合化を図るも一つの道筋をクローチエの思想の中に見出すことができる。本稿ではこの方向について検討する。<sup>(2)</sup>

そこで興味が湧くのは、クローチエとヴェーバーの間には知的交流があったのだろうかということである。この論点については P・ロッシの優れた論考がある。結論的にいえば、両者の直接的な対話の史料も少なく、思想上の影響関係もきわめて限定的であった。このような困難な状況にもかかわらず、ロッシは方法論という観点から二人を比較したうえで、やはりヴェーバーにより高い評価を与えている。<sup>(3)</sup>ただ、ロッシの作品が世に出た後、『クローチエ II アンントーニ 二 復書簡集』(一九九六年)が刊行されるのだが、これを参照すると、クローチエは C・アントーニを通じてヴェーバーを理解していることが分かる。<sup>(4)</sup>当時、クローチエは社会科学が内包していた相対主義の問題を認識しており、弟子アントーニはクローチエの問題意識を汲み取ったうえで、その著作『歴史主義から社会学へ』でドイツ歴史主義が陥った隘路を明らかにしようとしていた。<sup>(5)</sup>歴史主義を突き詰めていくとあらゆる時代や地域に固有の価値があると考える相対主義、もしくは発展段階や類型を想定しそれらとの関係を見るところという意味での相対主義に至ると考えられるが、クローチエの場合はそうではないのである。アントーニがクローチエに好意的な弟子であったとする観点のみから、その主張の重要性を割り引くことはあまりにも一面的である。<sup>(6)</sup>むしろ、クローチエやアントーニが社会科学の創成期にあたって批判的に見ていた問題をもう一度現在から照らし出すことが必要である。<sup>(7)</sup>

ロッシやヒューズの見解に対して、クローチエに積極的な意義を見出そうとする先行研究も多くある。R・フランキーニは『クローチエの歴史理論』および『歴史主義という経験』において、アントーニの問題意識を引き継ぎ、学問史におけるクローチエの歴史主義の意義をドイツ歴史主義と比較しながら解明しているほか、より最近の著作ではロバーツの『クローチエ思想の新解釈』が、R・ローティや H・G・ガダマーらとクローチエを比

較し、その思想の中に現代と過去との不断の対話によって書き換えられる開かれた歴史の観念、言語や文学から出発する解釈学を再発見しようとしている<sup>(9)</sup>。いずれも、人文学が保存してきた哲学的諸価値や文献学的伝統を強調する。本論考は、ヒューズやロッシが論じるようにクローチエが社会科学のさまざまな類型の構築にはさほど貢献しなかった点については認めたく<sup>(10)</sup>ない。かれらばかりかクローチエの弟子たちも歴史理論諸著作、とりわけ『思考としての歴史と行動としての歴史』に目を奪われるあまりに分析の中心から外してしまった『詩―詩と文学に関する批評・歴史序説』(以下『詩』と略記)<sup>(11)</sup>に着眼する。具体的には一九三〇年代におけるクローチエの精神世界における「文学」<sup>レツラトール</sup>概念の位置を検討してみたい。ここでいう「文学」は芸術作品のみを指すのではなく、歴史事実を構成する表現全般というより広い意味を持つ。この概念を検討することで、表現を出発点に普遍化をめざす学問をクローチエ思想に垣間見ることができ、この「文学」概念の検討こそ、価値相対主義に対するウエーバー的類型論とは違ったもう一つの可能性を探るうえで重要な理論的課題といえる。本稿はそのような見通しのもとでの準備作業である。

「詩に関する本」と「歴史に関する本」

クローチエの「文学」概念を説明するには『詩』(一九三六年)を参照すべきである。ただし、G・ガラツソが『クローチエとその時代精神』で指摘しているように<sup>(12)</sup>、この『詩』は『思考としての歴史と行動としての歴史』(一九三八年)および『現代哲学の特徴』(一九四一年)と一体をなしており、これらの作品との関係の中で解釈されねばならない。そこで、はじめに各作品の執筆過程を叙述しガラツソの見解を裏付けたうえで、クローチエの思想展開史という観点から、これら著作を理解するにあたって有効な時代区分を設定する。

クローチエは一九三六年八月十九日、アントワーニ宛書簡にて「現在準備している歴史に関する本（詩に関する本と対になる）のイントロダクションとなる論文を書いた」と述べている。<sup>(13)</sup> 日記から知られる執筆過程、および出版年からすると「歴史に関する本」とは『思考としての歴史と行動としての歴史』、「詩に関する本」とは『詩』を指す。『詩』は一九三五年の一月十四日に構想され、時に深夜三時に至ることもあった夏の集中的な執筆を経て、翌一九三六年に出版となる。<sup>(14)</sup> 『思考としての歴史と行動としての歴史』は、『詩』の編集がひと段落ついた、一九三六年八月八日の論考「思考としての歴史と行動としての歴史」の執筆が発点となる。<sup>(15)</sup> その後、書物としてまとめることを前提にしながら、一九三八年二月まで一年半以上という、『詩』の執筆と比べるとかなりの長期間にわたって次々と関連テーマの諸論考が追加されていき、同年、先の論考タイトルが本のタイトルとして採用されることで刊行される。<sup>(16)</sup>

これら二作品を補い、内的統一を与えているのが『現代哲学の特徴』（一九四一年）である。序文には、この作品が自らの「学者人生における最大の部分」を構成する『詩』と『思考としての歴史と行動としての歴史』をつなげる役割を果たし、とりわけ最初のいくつかの論考は「一種の結論」であると記されている。<sup>(17)</sup> 一九三八年十二月二十六日の日記ではこの作品の初めの四論考を自らの「哲学的な遺言書」とまで評している。<sup>(18)</sup> 実際には翌年以降も上記四論文に哲学関連論考を付加し、<sup>(19)</sup> また、一九三九年四月二十七日には本書の後半部に挿入されることになる「思考としての歴史と行動としての歴史」補論も書き始め、一九四〇年十月まで、実に一年半弱かかっている。<sup>(20)</sup> このような長い期間にわたる考察を経、一九四一年に『現代哲学の特徴』が刊行される。以上から、冒頭で示した三作品は内的な関係が意識されながら連続して執筆されたことが分かる。

つぎに、本稿の時代区分（一九三五年から一九四一年）について触れておこう。これまでの叙述に加え、一九四一年夏に自伝的文章も書かれていることから、ここまですクローチエ思想展開史における一時代として括ること

が可能である<sup>(21)</sup>。では、起点はいつだろうか。「歴史四部作」<sup>(22)</sup>が執筆・刊行された時期を含めて一九二一年から一九三四年までの理論的軌跡は『最新論集』にまとめられており、この期間の思想上の同一性を指摘することができる<sup>(23)</sup>。一九三四年に自伝的文章「わが自己批判のために」(一九一五年)の続編が執筆されている事実からも、クローチエが心理的には一九三四年をもって二応の区切りを設けていることがうかがえる<sup>(24)</sup>。クローチエ思想の展開があるのは『詩』(一九三六年)と『思考としての歴史と行動としての歴史』(一九三八年)、さらには『現代哲学の特徴』(一九四一年)においてであるから、一九三五年を起点とするのが適切である。

『詩』は世紀転換期以降から継続的に検討してきた美学の問題においてクローチエにかなりの確信を与えるものであった。その理論知見と「歴史四部作」執筆経験をもとにクローチエは『思考としての歴史と行動としての歴史』における集中的な哲学的思索の末、歴史主義に至る<sup>(25)</sup>。本稿では『詩』に示された「文学」概念の位置をその後の歴史主義という地点から振り返ることで、クローチエにおいて可能性として存在した思想を浮き彫りにしてみたい。

### 「直観」から「詩」へ

「文学」概念は当初「直観」と呼ばれていたものが展開されて成立するので、まずは、この「直観」のクローチエ精神哲学における位置を確認しておく。精神哲学の構造は一九〇〇年の「表現の学および一般言語学としての美学綱要」<sup>(26)</sup>において素描されている。はじめにクローチエは人間の活動には理論と実践があるとす。そのうえで、実践活動の前提に理論活動があり、その理論活動は「概念」と「直観」によってなされるが、両者の中でも「概念」は「直観」を前提にしており、この「直観」は表現にほかならないとされる。ここから、「直観」

はクローチエ哲学の根底部分を規定していることが分かる。また、クローチエにおいて哲学は歴史とされ、歴史を書く主体は政治・経済史にしても哲学史にしても、まずもって人間による表現＝直観という地平の上で判断せねばならない。しかしながら、当初クローチエは「直観」を表現と規定したものの、芸術の本質を追究する中で次第に「直観」概念の意味を明確化していき、「詩」と「詩でないもの」という区分に至る。一九三六年の『詩』においては、この「詩でないもの」の内容を検討し、自らの思想に位置づけている。本節では、世紀転換期以降のクローチエ美学の展開を振り返りながら「詩」と「詩でないもの」という区分の成立過程を詳しく見ていく。

そのさいに検討すべき著作は、クローチエ自身が『美学の諸問題とイタリア美学史への貢献』第三版の注で自己の思想の変遷を振り返りながら示してくれている。それによれば、一九〇〇年に発表された「表現の学および一般言語学としての美学綱要」は二論文「純粹直観と芸術の詩的性質」、「芸術表現の全体性という特徴」、『詩』によって「深化・拡大」されたという。ただし、この過程で「私は決して当初確立した原理を放棄したり変更したりする必要はなかった」として、概念上の連続性を示唆している。以下ではこの見解に沿って各著作を検討してみよう。

クローチエ美学は「表現の学および一般言語学としての美学綱要」でまず原型が描かれ、その完成版たる『表現の学および一般言語学としての美学』（以下『美学』）が一九〇二年に発表される。これらの作品では、芸術とは「知的な事実からは独立・自律した直観」の「表現」、すなわち美的事実であるとのテーゼが打ち出されている。そして、この「美的事実」（直観）と「知的事実」（概念）のみが人間の理論活動を構成するのであって、これらのほかに理論活動は存在しないのであった。つぎに、「美的事実」に注目してみると、「美的事実」は『形式』であり、それ以外のなものでもない」とされ、「内容」と「形式」の区別という観点でいえば

「表現」は「形式」に当たる。もちろん、芸術作品を創作する際の素材となる「内容」がなければ「形式」も存在し得ないわけだが、この時点でのクローチエにとってこの「内容」はあくまで精神の外にあり、美の本質ではなかった。美はあくまで人間精神が認識したイメージや表象（直観）を個性的な方法で表現することにのみ存する。さらに、デ・サンクティスが「内容」と「形式」を文芸批評や文学史における概念として提示したのたいてい、クローチエはこの自然的世界である「内容」から人間精神の活動たる「形式」を峻別し、これを通念とは違つて論理的認識以前の認識として人間精神に普遍的に備わるものと述べる<sup>(31)</sup>。

つぎに、一九〇八年の論文「純粹直観の詩的性格」においては、「純粹」という強調語を用いて先のテーゼが説明される。こうして、言語による情報伝達のための作品、情熱のはけ口としての作品、既存の文学形式だけで構成された作品と「純粹」直観の作用によつて形成された芸術作品とが区分される。芸術作品を見分けるときの判断基準は著者の「人格」が表出されているか否かである<sup>(32)</sup>。それゆえ、芸術家は自身がじっさいに感じたこと（「精神状態」）を表現すべきとされ、このような芸術家の態度が「誠実さ」と呼ばれた<sup>(33)</sup>。これまでは芸術を成立させる要素として「形式」のみが強調されていたが、ここで初めて「内容」にも配慮がなされている<sup>(34)</sup>。一九〇七年に『実践の哲学』を執筆したクローチエは、もはや「人間」に対する「自然」といったような精神の外にある一切の存在を認めず、当初精神の外の存在と規定していた「内容」を精神の実践活動と位置づけなおしたからである。ただし、「内容」といつても特定の事実を芸術的なものとして限定したわけではなく、厳密に言えば、「内容」そのものというよりは、「内容」と「形式」の関係に注意が向けられている。クローチエによれば、たとえば戦争であれ不倫関係であれ、芸術家の政治・宗教的傾向や日常的行いがいかなるものであるにせよ、それとは独立に優れた芸術作品は成立しえた。重要なことは現実の中で経験した「内容」が何であったとしても、芸術家がその「内容」に適した「形式」に与えて表現できているか否かであった<sup>(35)</sup>。

更なるクローチエ美学の重要な転機は一九一八年であった。この年に発表された論文「芸術表現の全体性という特徴」では、「詩」という概念の創出に着手される。たしかに、この論文ではこれまで使用していた「芸術」という言葉に加えて、「詩」という用語が頻繁に用いられている。また、この論文は一九一七年に執筆されるのだが、この年から『クリティカ』誌上に連載されていた「現代イタリアおよび外国文学に関する注釈」が一九一九年からは「現代イタリアおよび外国の詩に関する注釈」と名称変更がなされ、その後これらの諸論考が単著『詩と詩でないもの』にまとめられている。クローチエが一九一七年から一九一九年の期間に「詩」という概念構築を行い、自らの概念の精緻化に伴って連載記事とその後の論文集のタイトルを変更するまでに至っていることがうかがえる。「詩」という言葉が用いられるようになった背景は二つある。第一に、それ以前のようにたんに芸術を「直観の表現」とするだけでは「形式」のみに注意が向けられてしまうためである。つまり、クローチエは論考「純粹直観の詩的性格」において示した「内容」と「形式」の必要性および両者の関係を含めた言葉が必要としたからである。第二に、一九一八年の「芸術表現の全体性という特徴」では、一九〇八年における定義すなわち、芸術はたんなる「表タビ象シヤウ」ではなく「個性的形式インディビデュアルフォーム」であるとの主張に加え、芸術に「普遍性ウニヴァーサル」をも要求されるようになり、概念上の展開がなされたからである。クローチエは一九〇八年の論文「純粹直観の詩的性格」以後、『歴史叙述の理論と歴史』を一九一五年にドイツ語版で、一九一七年にイタリア語版で刊行している。ここでの主題は人間精神における新しい経験を「進歩」とし、これを促進する行為を「道徳活動」とする点にあったのだが、この論理を美学においても推し進めていくと、一回性の芸術創出行為も歴史の進歩に貢献しているから「道徳活動」とされた。こうして「道徳活動」としての「詩」は人間という共通項を媒介にした超時代性・超空間性が含意され、普遍性という要素も内包することになった。他方で、先の論集のタイトル『詩と詩でないもの』から分かるように、新たに「詩でないもの」の位置づけを明確にするという理論的仮題が

生じるのである。

「文学」と「文明」

『詩』においてはこれまでの美学理論上の展開が体系的にまとめられるとともに、いよいよ「詩でないもの」が検討に付される。クローチュエにとつて「詩」とは「内容」と「形式」を一致させ、普遍の中に特殊なものを見豊かな人間性を表現することであった。<sup>(38)</sup>このような定義によって、「詩」が他の表現一般と同一視されることを防ぐ。「詩」は表現という点では「散文的表現」、「感情的表現」、「修辭的表現」と共通するものの、精神作用という点では異なる。つまり、精神哲学に基づけば、「散文的表現」は「概念」とされ、「感情的表現」、「修辭的表現」は「実践」の世界に置かれる。クローチュエは「詩」概念を純化しその指示範囲を確定していくわけだが、だからといって「詩」に包括されない表現の意義を否定しているわけではなく、むしろ同時にそれらの表現の位置づけを明確化している。すでに論考「芸術表現の全体性という特徴」においてクローチュエは感情のはけ口とするような作品を「芸術的には虚偽」、「道德的にも非難されるべき」であるとしながらも、<sup>(39)</sup>これら「普遍性」に至らない作品をも検討し、哲学的、宗教的、道德的一般傾向を把握しておくことに意義を認めている。<sup>(40)</sup>しかし、「詩」以外の表現に「詩でないもの」、「詩に反するもの」という言葉を当てて体系的に検討するのは『詩』がはじめてである。『詩』の重要性はこれらの表現が「詩」の形成を促進する場合もあれば、妨害する場合もある点に気がついたことである。たとえば、詩人が自らの精神状態を表現する方法を探すとき、図書館、書物、アカデミーに残された知識を使って創造する場合もあれば、逆に伝統や因習によって押しつぶされ、同じ表現の繰り返しに陥ってしまう場合もある。クローチュエは「詩」には至らない表現であっても、前者のような機能を果たす表現に

は自らの歴史主義の中で認識上不可欠な役割を与えようと試みる。

『詩』で確立した「詩」、「詩でないもの」、「詩に反するもの」を歴史主義という観点から考察すると、その意義はいっそう明らかとなる。そこでまず、クローチエの歴史主義について論旨に関係ある限りで触れておく。クローチエは『実践の哲学』において、哲学とは精神の哲学でしかありえず、いわゆる「自然」といわれるものも精神に包摂されるとの哲学的立場をとる。そのうえで、『歴史叙述の理論と歴史』、『思考としての歴史と行動としての歴史』での考察を経、精神の哲学とは具体的には歴史思想にはかならないとの見解を打ち出し、「すべての認識は歴史的認識である<sup>(42)</sup>」と宣言するに至る<sup>(43)</sup>。

クローチエのいう歴史とは直線的なものでも循環的なものでもなく、一回性としての歴史を意味し、「事実」に基づいて書かれねばならない。この「事実」は、ヴィーコの観点から、主体たる人間によって「創られたもの」であり、そうであるがゆえに人間の理解を通じて「真理」となる<sup>(45)</sup>。すなわち、史料そのものが真理を示すわけではなく、史料が人間の思考を通じて再構成されることによって「真理」たりうる<sup>(46)</sup>。とすれば、「詩」、「詩でないもの」、「詩に反するもの」のいずれも表現として歴史の史料となりえる。

事実から歴史が創られるには二つの段階がある。第一が事実の年代順の確定や史料批判という段階であり、第二がこうした諸事実の発生と展開を知ったうえで、それらの特徴や役割を判断する段階であり、後者こそが認識において本質的な意義を持つ<sup>(48)</sup>。以上の過程を通じて形成される「概念」、たとえばルネサンス、啓蒙主義、自由主義、古典主義、バロック、ロマン主義といったものは、個別具体性とともに普遍性をも併せ持つ「概念」であり、物事を便宜上分類する「経験概念」とは異なる<sup>(49)</sup>。

ただし、すべての歴史が真正なものとは限らない。たとえば、歴史において諸事実のあいだに必然性や偶然性を見出すことは真正な歴史ではないとされる。こうした必然性を見出そうとする操作の中には、たとえば、先行

する事実と後続する事実を因果関係で結ぶことも含まれる。<sup>(50)</sup>クローチュエによれば、「原因」という概念は自然科学のものであり、あくまでその領域に留まって自らの役割を果たすべきであった。かれは自然科学および法則定立型の社会科学を、因果関係を把握することで「行動の指針」<sup>(51)</sup>を得るという実践活動と位置づけている。それゆえ、このような社会科学化された歴史は現実ではなく、法則的に繰り返されるものを反映しているに過ぎず、たんに現行の法律なり制度なりの維持・改変という視点から書かれ、普遍に達することのできない方法とされる。<sup>(52)</sup>

クローチュエは歴史叙述の連続性の厳密さを追究していったドイツ歴史主義の業績を高く評価しながらも、その先にあつた価値の相対化や客観的な科学としての歴史へは向かわない。かれの歴史はモデル形成ではなく、史家の現代的な問題意識から過去に表現されたもの一般に降りていき、そこに新しい光を当てて事実を明らかにすることで創られる。そのさい、認識自体を形成するカテゴリー（真、善、美、有用）だけは歴史化することはできないとされ、<sup>(53)</sup>その体系は維持される。したがって、「詩」、「詩でないもの」、「詩に反するもの」は歴史の史料ではあつてもそのカテゴリー関係に従い、同レベルにあるわけではない。「詩」は美と一致し、「詩でないもの」は後に詳しく論じるが美を一部含みながらおおむね真もしくは有用と一致する。それでは、「詩に反するもの」はいずれにあたるのか。

この問いに答えるにあたってカテゴリーの関係について若干触れておく。クローチュエは『思考としての歴史と行動としての歴史』第十一章で「善なる仕事とは、具体的には美と真と利益を実現する仕事以外のものでありえない」<sup>(54)</sup>としており、歴史の対象はこの「善なる仕事」であると述べる。<sup>(55)</sup>とはいえ、美、真、有用を追究し歴史に変化をもたらすあらゆる行為がつねに「善」であるとは限らない。「善」の反対側にもうひとつの方向性が潜在している。「歴史四部作」では「自由」と「頹廢」が対立し、前者が後者を不断に克服していくさまが叙述されたが、『思考としての歴史と行動としての歴史』ではこの二項対立関係に「善」と「悪」という言葉が用いられ、

後者の意味が明示される。すなわち、人間は真、美、有用という価値の実現（善）を目指し、そのために他のカテゴリーに触れるのだが、そのさい、活動する当人は他のカテゴリーの自律性を尊重すべきであり、目的を達したうえでさらに別のカテゴリー領域へ侵犯し、その活動の上位に立つべくその自律性を破壊しようとするとき、その行為は「悪」と呼ばれる。<sup>56</sup> この「悪」はたとえ歴史上新しい行為であったとしても叙述するにあたらぬ。

以上を前提にすると、「詩」に對置される「詩に反するもの」とは「美」に對する「醜」、道德的な意味で言えば「悪」となる。「詩に反するもの」は芸術的創造過程に実践もしくは学問上の目的を介入させ、詩的要素を消失させてしまうものであり、他の主体にとって「詩」を創るための「内容」となりえた場合以外は歴史叙述上の意味がないとされる。

「詩」と「詩に反するもの」の二分法の間(57)に置かれたものが「詩でないもの」である。「詩でないもの」は「詩」に比し「内容」と「形式」の一致に至っていないという点で不完全だが、「詩に反するもの」と対照的にその存在自体に歴史上積極的意義が認められ、そこには「芸術のための芸術」と「文学的表現」エウレシシーネ・レクテラリア「ないしは「文学」が含まれる。<sup>58</sup> 前者はダヌンツィオの文学に顕著に見出され、既存のイメージや表現を組み替えて美を表現しようとする潮流である。かれの作品は概して「形式」としては完成度が高いものの「内容」とうまく結びついていないために「詩」に達していないとされる。<sup>59</sup> 後者は「形式」の洗練ではなく、「内容」の充実が含意され、次のように説明されている。

文学的表現とは礼儀作法に似ていて文明と教育の一部であり、詩的でない表現、すなわち、感情的表現、散文的表現、修辭もしくは刺激的表現といったものが自己を否定しないようにしながらも詩的・芸術的意識を損なわないよう、詩的な表現との間に調和を見出すところに存在する。それゆえに、詩が人間に生來備わった言語であるとするならば、文学

は文明における言語の制度、あるいは少なくともそうした目的を背負った諸制度のうちの一つである。<sup>(60)</sup>

クローチエはまず言語の本質を情報の伝達手段と見るのではなく、「詩」ととらえたうえで、言語のこの詩的性質を壊すことなく、有用や真といった他の活動を表現したものを「文学」と見ている。それゆえ、ここでいう「文学的表現」は小説のような狭義の文学作品を指すわけではなく、広く政治家の修辭や哲学論文なども含み、他の精神的傾向と渾然一体となった表現を指し、具体的には「感情の文学」、「修辭の文学」、「気晴らしの文学」、「教育の文学」として表出する。<sup>(61)</sup> こうして、クローチエ美学において、いまや「美」として肯定的な意味を持つと判断されるものがいわば上位の「詩」と下位の「文学」という二重構造を持つようになる。ただし、美的観点から下位だからといって、その概念に分類された作品があらゆる観点から劣っているわけではない。たとえば、「文学」に含まれる哲学論文などの学問作品は、「形式」との一致をなしえず「詩」に至らないものの、「内容」上は「詩」に匹敵する優れた文学・学術的価値や同時代史料としての価値を持ちうるからである。

つぎに、クローチエの歴史主義における「文学」概念の独自性を検討すると、この概念が「文明」の維持にとって不可欠な役割を果たすとされている。「文明」という言葉は「頹廢」に対置され、「善」と「悪」のクローチエ的な二分法にしたがえば「善」にあたり、歴史の「進歩」を促すものととらえられている。<sup>(63)</sup> 「文学」自体はたとえ「詩」ではないとしても、歴史から排除されてはならない。<sup>(64)</sup> 「文学」は後続の時代の「詩」の形成のための言語経験の保持という役割を果たすからだ。<sup>(66)</sup> つまり、「詩」は純粹に先行する時代の言語形式だけでは生まれず、<sup>(67)</sup> 学問や政治・経済の影響を被りつつ生み出されるわけだが、そのさい他の精神活動と渾然一体となった表現が「文学」として成立している必要があるということである。この「文学」における諸カテゴリー間の交流関係に着眼することで歴史叙述はいっそう豊かなものとなろう。<sup>(69)</sup> と同時に、価値体系を伴った歴史の可能性も垣間見

ることができる。そしてこれらの点にこそ、「詩」概念に従属的でない、歴史における「文学」概念独自の意義を見出すことができるのではないか。

おわりに

以上の考察から、一九三〇年代のクロウチエの歴史主義の中で展開された「文学」概念の位置が明らかとなった。この概念は政治・経済史が物質や生命における有用性や合理化作用の因果関係の叙述のみならず、「文学」に表出する他のさまざまな活動を把握しておく必要を指摘している。その意義の第一は、社会科学によって確定された因果関係ないし法則が一つの可能性であることを理解させてくれることである。第二は、「文学」が歴史における詩や哲学や政治といった多様な精神活動の交流の結節点であることによってその様態を明らかにするのに役立つことである。感情の発露や修辭といった人間の表現を切り口にその精神を映すことで、詩の展開過程を他の実践活動との関わりの中で理解するのを助ける。しかも、こうした「文学」は法則を見ようとする社会科学では近づくことのできない人間の精神世界の表出であるとともに、意思決定の根底に存在する理性的でない部分をも含めた、政治・経済を担う人々の実践に関する研究の基礎をも構成する。社会科学にはその発展において人間精神の深層にまで迫る「文学」から離れることなく、むしろ積極的に目を向けることが求められているのではないだろうか。

- (一) H. Stuart Hughes, *Consciousness and Society. The reconstruction of European Social Thought 1890-1930*, Knopf, New York 1958 (生松敬三・荒川幾男訳『意識と社会——ヨーロッパ社会思想史一八九〇—一九三〇年』み

- ず書房、一九六五年、二〇七—二〇八、二二七頁。  
 (2) この時代に至るクローチェの思想展開および概念の説明は拙著『クローチェ 1866—1952』藤原書店、二〇一〇年を参照。  
 (3) クローチェとヴェーバーの関係についてはP・ロッシ「歴史社会学と『絶対的』歴史主義」マックス・ウェーバー講義『歴史主義から社会科学へ』みず書房、一九九二年、一三三—一七四頁、またロッシ自身のクローチェ解釈については、P・Rossi, *Storia e storicismo nella filosofia contemporanea*, Lerici, Milano 1960, pp.287-330 の優れた論考を参照。  
 (4) *Carteggio Croce-Antoni*, a cura di M. Musté, introduzione di G. Sasso, Istituto Italiano per gli Studi Storici, Napoli 1996, lett. 21, 28.  
 (5) C. Antoni, *Dallo storicismo alla sociologia*, Sansoni, Firenze 1940 (讀井鉄男訳『歴史主義から社会学へ』未来社、一九五九年) 序文参照。  
 (6) C. Ocone, *Benedetto Croce. Il liberalismo come concezione della vita*, Rubbettino, 2005, p. 146.  
 (7) C. Antoni, *Lo Storicismo*, Edizioni Radio Italiana, 1957 (新井慎一訳『歴史主義』創文社、一九七三年) 一八七—一八九頁。  
 (8) R. Franchini, *La teoria della storia di Benedetto Croce*, 2 ed., Morano, Napoli 1966, cap. VII - conclusione, 45. 同 id., *Esperienza dello storicismo*, Giannini, Napoli 1953, pp. 13-38, 146-169, id., *Croce interprete di Hegel e altri saggi filosofici*, 2 ed. riveduta, Giannini, Napoli 1967, pp. 72-94. 同 id. 他、E. De Martino, *Naturalismo e storicismo nell'etnologia*, Argo, Lecce 1995 (1 ed., Laterza, Bari 1941), cap. III, A. Bausola, *Filosofia e Storia nel pensiero crociano*, Società editrice vita e pensiero, Milano 1967, cap. X, XI e conclusione, V. Vitiello, *Storia e storia nel pensiero di Benedetto Croce*, Libreria scientifica editrice, Napoli 1968, cap. IV を参照。  
 (9) D. D. Roberts, *Una nuova interpretazione del pensiero di Croce: lo storicismo crociano e il pensiero contemporaneo*, Istituti editoriali e poligrafici internazionali, Pisa-Roma 1995.  
 (10) B. Croce, *La storia come pensiero e azione*, Laterza, Bari 1965 (1 ed., 1938) (『歴史』Storia) .

- (11) B. Croce, *La poesia. Introduzione alla critica e storia della poesia e della letteratura*, Laterza, Bari 1953 (1 ed., 1939) (以下『*Poesia*』)。
- (12) G. Galasso, *Croce e lo spirito del suo tempo*, Laterza, Roma-Bari 2002, cap. XV。
- (13) 両作品が理論上密接な関係にあることは、たよるべき *Carteggio Croce-Antoni*, cit, lett. 15 より見られる。
- (14) B. Croce, *Taccuini del lavoro*, 6 voll., Arte tipografica, Napoli 1987 (以下『*Taccuini*』), 14 gen., 28 lug. -7 set. 1935。
- (15) *Taccuini*, 8 ago. 1936。
- (16) 1935年終るとも知れない過程にクロウチエ自身も「一種の嘔吐感」を感ずると日記に記している (*Taccuini*, 16. apr. 1938)。
- (17) B. Croce, *Il carattere della filosofia moderna*, a cura di M. Mastrogregori, Bibliopolis, Napoli 1991 (以下『*Carattere*』), avvertenza。
- (18) *Taccuini*, 26 dic. 1938。
- (19) *Taccuini*, 2 dic. 1938。
- (20) これには次の事情がある。「思考としての歴史と行動としての歴史」は出版後、同年すぐに第二版が公刊されているように多くの知識人の関心を引いた。第三版の刊行にあたって論文も追加されている (*Taccuini*, 16; 23 feb. 1939)。クロウチエは、当時「思考としての歴史と行動としての歴史」はまだに十分に説明し尽くされていないと考えていたので、その解説を『現代哲学の特徴』における「補論」へと受け継がせたのである。
- (21) B. Croce, *Note autobiografiche* (1941), in id, *Etica e politica*, Laterza, Bari 1967, pp. 373-377。
- (22) 「歴史四部作」とは *Storia del regno di Napoli*, Laterza, Bari 1925 (『ナポリ王国史』)、『*Storia della età barocca in Italia*, Laterza, Bari 1929 (『イタリアにおけるバロック時代史』)、『*Storia d'Italia dal 1871 al 1915*, Laterza, Bari 1928 (『一八七一年から一九一五年までのイタリア史』)、『*Storia d'Europa nel secolo decimonono*, Laterza, Bari 1932 (『十九世紀ヨーロッパ史』)』を指す。
- (23) この作品は一九二一年から一九三四年に書かれ、『クリティカ』をはじめさまざまな雑誌に発表された論文をそ

- れぞれ第一章「美学」、第二章「論理学と倫理学」、第三章「哲学の永続性と歴史性」へと再編し、自らの理論をまとめたものでもある(B. Croce, *Ultimi saggi*, 2 ed., Laterza, Bari 1948 (1 ed., 1935), avvertenza)。
- (24) Taccini, 3 ott. 1934. 自伝のトキスと49 B. Croce, *Note autobiografiche* (1934), in id., *Etica e politica*, cit., pp. 357-372.
- (25) B. Croce, *Filosofia come storicismo assoluto*, in *Carattere*, pp. 9-10. クローチェは自らの歴史主義を「絶対的歴史主義」と説明している。この言葉には「哲学のみならず詩や文学をも含めた認識一般における徹底した歴史化」という意味が込められている。Cfr. R. Franchini, *Esperienza dello storicismo*, cit., pp. 36-37の指摘も参照せよ。またクローチェは自らの歴史主義を人文主義の延長線上に位置させている。この点に関し49 B. Croce, *Il posto di Hegel nella storia della filosofia*, in *Carattere*, cit., pp. 52n, 53, id., *Il concetto filosofico della storia della filosofia*, in *Carattere*, cit., pp. 59-60, *Storia*, pp. 310-315を参照。
- (26) B. Croce, *Tesi fondamentali di un' estetica come scienza dell'espressione e linguistica generale*, in id., *La prima forma della Estetica e della Logica*, a cura di A. Attisani, Principato, Massina-Roma 1925, pp. 3-117.
- (27) B. Croce, *Problemi di Estetica e contributi alla storia dell'estetica italiana*, Laterza, Bari 1940, p. 30.
- (28) B. Croce, *Estetica come scienza dell'espressione e linguistica generale*, Sandron, Milano-Palermo-Napoli 1902 (以下 *Estetica*), p. 14. 「表現」は言葉によるものの限らぬこと (*Ibid.*, p. 11.)。
- (29) *Estetica*, p. 19.
- (30) *Estetica*, pp. 8-9.
- (31) *Estetica*, pp. 28-29.
- (32) B. Croce, *L'intuizione pura e il carattere lirico dell'arte*, in id., *Problemi di Estetica e contributi alla storia dell'estetica italiana*, Bibliopolis, Napoli 2003, pp. 26-28.
- (33) B. Croce, *L'intuizione pura e il carattere lirico dell'arte*, cit., p. 35.
- (34) B. Croce, *L'intuizione pura e il carattere lirico dell'arte*, cit., pp. 30-32.
- (35) 以上の立場は一九一三年の『美学概論』で簡潔に要約されるが、ここでは芸術追求行為が「道徳」とされている

- 点には注意しておくべきである。(B. Croce, *Breviario di Estetica*, in id, *Nuovi saggi di Estetica*, Bibliopolis, Napoli 1991, p. 66. 山田忠彰編訳「エステティカ イタリアの美学 クローチエ&バレイエン」ナカニシヤ出版、二〇〇五年に邦訳が所収されている)。
- (36) B. Croce, Il carattere di totalità dell'espressione artistica, in id, *Nuovi saggi di Estetica*, cit, pp. 115-116.
- (37) 「劣った芸術家は己の人生やその時代の社会に関する資料になりやすく、優れた芸術家は時代や社会や実践的な人間としての自分を超越する」(*Ibid.*, p. 116) と述べられている。
- (38) *Poesia*, pp. 57-58. 行った純粋な「詩」はホメロス、ゲーテ、イブセン、トルストイなどに見出される。
- (39) B. Croce, Il carattere di totalità dell'espressione artistica, cit, p. 120. 行った特徴のある「現代文学」をクローチエは「病氣<sup>マラディヤ</sup>」と表現している (*Ibid.*, pp. 123-124)° B. Croce, *Aesthetica in nuce*, in id, *Ultimi saggi*, cit, p. 27 ではこの病氣の例としてロマン主義を挙げ、同じような傾向を持つ同時代の思想潮流として表現主義や未来主義が挙げられている。
- (40) B. Croce, Il carattere di totalità dell'espressione artistica, cit, pp. 125-126.
- (41) B. Croce, Filosofia come storicismo assoluto, cit, p. 9. B. Croce, *Paralipomeni alla «Storia»*, in *Carattere*, pp. 232-233.
- (42) *Storia*, p. 19.
- (43) クローチエの F. Meinecke, *Die Entstehung des Historismus*, Oldenbourg, München-Berlin 1936 (菊盛英夫麻生健訳『歴史主義の成立(上)(下) 筑摩叢書 一九六七—六八年) に関する議論は *Storia*, pp. 51-64 を参照。またクローチエの自由論は精神哲学、歴史主義と矛盾なく結合されている。この点については B. Croce, *Giudizio storico e azione morale*, in *Carattere*, p. 102 および B. Croce, *Principio, ideale, teoria. A proposito della teoria filosofica della libertà*, in *Carattere*, pp. 107-112. を参照。「自由」と政治体制の関係については *Storia*, pp. 249, 251, 257 を参照。
- (44) 「頽廢」がときに再帰するという点からすれば循環しているが、同じ「頽廢」が繰り返すことはないという点からは歴史は直線的ではないものの「進歩」するものであるととらえられ、一定の方向を持つものと観念されている。

- (45) *Storia*, p. 126.
- (46) *Storia*, p. 152. このようなクローチェの歴史叙述においてはあくまでも理性による把握が優位を占め、対象が宗教であっても歴史家自身は理性によつてこれを把握しようとする ( *Storia*, pp. 214-216 ) 。
- (47) 文献学の意義については B. Croce, *Gli studi storici nella varietà delle loro forme e i loro doveri presenti* (1934), in id., *Ultimi saggi*, cit., pp. 313, 317, 319. については文献学と修辭学と歴史がそれぞれに役割を持ち、互いに協力関係にあると説明される。
- (48) *Storia*, pp. 127, 145. これらの二つの過程全体が歴史とされ、そのうちの第二段階が哲学と呼ばれる。哲学は「歴史叙述の方法論」と位置づけられ歴史に包摂される ( *Carattere*, p. 28 ) 。
- (49) *Storia*, pp. 128-133, 295. 「擬似概念」は「論理学」(一九〇九年)において「経験概念」「抽象概念」に大別され、いずれも図式や分類を提供してゐるに過ぎず、歴史を叙述するその手段的役割しか負わない ( B. Croce, *La logica come scienza del concetto puro*, Bibliopolis, Napoli 1994, p. 252 ) 。
- (50) *Storia*, pp. 14-16
- (51) B. Croce, *Paralipomeni alla «Storia»*, cit., p. 182.
- (52) B. Croce, *Paralipomeni alla «Storia»*, cit., p. 136. Cfr. B. Croce, *La grazia e il libero arbitrio*, in id., *Ultimi saggi*, cit., pp. 290-295. とは「え、因果的な関係を確定する知的作業は一般的傾向を知るためには有効ではある ( B. Croce, *La filosofia della pratica*, Bibliopolis, Napoli 1996 (1 ed., 1909), pp. 317-326, id., *Paralipomeni alla «Storia»*, cit., pp. 236-237 ) 。
- (53) *Storia*, pp. 242-243, 269.
- (54) *Storia*, p. 43. クローチェ精神哲学における「道德活動」の意味内容もいくつかの展開を経て洗練されてゐる。まず「美学」においては「合理的な目的を欲すること」と定義され、「ある目的を欲する」という「経済活動(政治をも含んだ) 有用性を求める活動」と対比され、「道德活動」もかならず「経済活動」を通じてでなければ実現できなごとの主張が強調されてゐる ( B. Croce, *Estetica*, cit., p. 60 ) 。
- さらに、「経済の哲学に帰せられる法の哲学」(一九〇七年)においては、「個の活動」を手段にするこごびなされる「普通の活動」と定義される ( B. Croce,

*Riduzione della filosofia del diritto alla filosofia dell'economia*, a cura di A. Attisani, Ricciardi, Napoli 1926, p. 53)。  
 ゃらに『倫理学断章』においては「新しい経験を提供する」として人間の歴史を進歩させる活動」とされ、その普遍  
 性の基準が歴史に求められる (B. Croce, *Frammenti di etica* (1922), in id., *Etica e politica*, cit., pp. 94, 134-136,  
 165-168)。

(95) *Storia*, p. 113. 対象となるのはあくまで実現された作品や制度であって、作者や創設者の意図ではなく (Storia,  
 p. 205)。また哲学と詩の歴史を比較したとき、哲学者は前提となる以前の哲学体系をふまえて展開させるが、詩人  
 はこのような前提を持たないといわれる (B. Croce, *Suggerimenti dell'estetica*. Per riforme in altre parti della  
 filosofia, in *Carattere*, cit., p. 77. 上の点については A. Parente, *Il tramonto della logica antica e il problema della s-*  
*toria*, Laterza, Bari 1952, pp. 161-181 の解釈を参照し修正を加えて C. Antoni, *Commento a Croce*, Pozza,  
 Venezia 1955, pp. 173-183 を参照せよ)。

(96) *Storia*, pp. 159, 162-164. 「悪」について B. Croce, *La teoria dell'errore* (1924), in id., *Ultimi saggi*, cit., pp.  
 341-342 について論じられてはいた。ただし、この論考では「歴史四部作」の執筆過程を概念化され、精神哲学上に  
 位置づけられることによる「頹廢」との関係が明確化してはいる。

(97) *Poesia*, pp. 28-31, 61-63.

(98) *Poesia*, pp. 55, 61, cf. *ibid.*, p. 120.

(99) *Poesia*, p. 53. 國司航佑「ヘネデット・クローチエのダヌンツィオ批評——評価はなぜ変化したのか」『イタリア  
 学芸誌』第六〇号、一七七一—二〇〇頁の具体的な検討を参照。

(99) *Poesia*, p. 34. cf. P. D'Angelo, *Estetica*, in AA.VV., *Il filosofo Croce*, Bibliopolis, Napoli 2008, pp. 37-38.

(99) *Poesia*, pp. 41-49.

(99) *Poesia*, p. 120.

(99) *Storia*, pp. 159, 162-164.

(99) たゞせばこの必要性は *Poesia*, pp. 153-154, 157 に見られる。

(99) *Poesia*, p. 34.

- (99) *Poesia*, pp. 32-34.
- (100) *Poesia*, p. 136.
- (101) *Poesia*, pp. 82, 139-140. cfr. B. Croce, *Intorno all'intuito e al giudizio* (1934), in id., *Ultimi saggi*, cit., pp. 261, 264, id., *Apoliticismo*, in id., *Ultimi saggi*, cit., p. 299. 国家と文化の關係についての論考として。B. Croce, *Amore e avversione allo stato* (1933), in id., *Ultimi saggi*, cit., pp. 300-311 等を参照。その中で *Taccuini*, 5 dic. 1935 年参照。翻記としての興味ある考察を *Poesia*, pp. 102-109.
- (102) B. Croce, *Punti di orientamento della filosofia moderna* (1926), in id., *Ultimi saggi*, cit., pp. 220-221.